

[5]

「グローバル」「ライフデザイン」「コミュニティー」など、カタカナの学部・学科が増えている。国際化、福祉、コンピューターなどは、今の社会に求められていることばかり。大学は生き残りをかけて、ユニークな学部・学科を新しくつづけている。

カタカナ学部・学科あれこれ

・京都精華大	マンガ学部
・東京工芸大	アニメーション学科
・明海大	ホスピタリティ・ツーリズム学部
・法政大	キャリアデザイン学部
・東洋大	ライフデザイン学部
・神戸学院大	総合リハビリテーション学部
・帝京科学大	アニマルサイエンス学科
・多摩大	グローバルスタディーズ学部(2007年予定)
・大阪電気通信大	デジタルゲーム学科

[6]

大学に入りやすくなったためか、十分な学力をつけないまま大学生になってしまった学生が増えている。

2006年度にはじめて大学に入学した「ゆとり教育世代」学生の英語力は、6割が中学生レベルしかないとわかった(独立行政法人・メディア教育開発センター調べ)。また、2005年の日本語能力テストでは、国立大生の6%、私立大生の20%、短大生の35%が「中学生レベル」と判定された。

大学生の基礎学力を上げようと、中学、高校レベルの基礎から学びなおす講座を設ける大学も増えている。東京大学では、理系の1、2年生に高校レベルの生物を教える講座を1998年から続けている。また、補習授業などに取り組む大学は、6割以上にもなっているという(文部科学省、2003年度)。

[7]

志願者が減っている大学は、学生集めに必死だ。テストで学力をみる一般入試だけでなく、推薦入試の募集定員を増やす大学も多い。私立大学入学者の4割近くが推薦入試で選ばれている。

推薦入試は、もとは学校長が推薦する受験生向けの入試で、学力試験はなく調査書などの資料だけで合格、不合格を決めていた。今は学科試験をするものの、校長推薦がいらないもの、学力だけでなくその人のすぐれた能力をみるものなど、多様化している。

いくつかの試験日から日程を選べる試験日自由選択制や、自分の住んでいる地元で受験できる地方試験

など、受験しやすくなっている。

また、高校での成績や活動、面接などをみるAO入試も増えている。